

「罪人を招くために」

マルコ2:13-17

23.1.29 平吹光太

本日の箇所は、ある人物がイエス様に弟子として招かれ、食卓を共にすることが記されています。ここから神が私たちに教えたいと願っておられることを共にみていきたい。

I. 招かれる恵み

「イエスはまた湖のほとりへ出て行かれた。すると群衆がみな、みもとにやって来たので、彼らに教えられた。」(13節)

この時もイエス様が行かれるところには多くの群衆が集まった。今まで教えを聞き、奇蹟を見、またその噂を聞いた者達がイエス様の所に押し寄せていた。彼らは目を輝かせイエス様が何を語り何をされるか見ていた。イエス様はそんな彼らに湖のほとりで、また歩きながらも御国の福音について教えられた。歩いている途中でイエス様はある人物に出会われる。「イエスは道を通りながら、アルパヨの子レビが収税所に座っているのを見て、「わたしについて来なさい」と言われた。すると、彼は立ち上がってイエスに従った。」(14節)

イエス様は多くの人の中に居ても一人ひとりに目を留められており、この時、目を留められた人物は取税人のレビ(マタイ)。彼は周りの人達から悪者扱いをされていた。一般的に取税人とは国に納める税金を人々から集めるお役所の人で健全な仕事。しかし当時のイスラエルにおける取税人は軽蔑される程の仕事。異邦人(外国人)、遊女と同等とみなされていた。その理由、①この時、イスラエルはローマ帝国の支配下にあったため、自国のため税金を徴収するのではなく、敵国ローマに税金を集めていたため。②取り立ては取税人に任せられていたので、彼らは必要以上に税金を集め、私服を肥していたため。③当時、神の民であるユダヤ人にとって異邦人は汚れており、そのため異邦人であるローマ人の手下になっている者(取税人)も汚れている者とされていたため。これらの理由で、取税人は同じユダヤ人から憎まれ、裏切り者扱いされ、遠ざけられていた。イエス様はそのような取税人のレビ(マタイ)の前を通り、目を留められ、「わたしについて来なさい」と言われた。レビ(マタイ)はイエス様のことを知っていたはず。彼は予想外の言葉に自分の耳を疑った。なぜなら今まで周りからは裏切り者扱いされ、冷たい軽蔑の眼差しを向けられており、自分も神の前に恥ずべき者と自覚していたはず。そのような彼をイエス様は招かれた。「わたしについて来なさい」とは、全てのものを捨ててイエス様に従うということ。そのイエス様のお言葉の中には悪いとは分かっているも繰り返し犯してしまう罪を認め、悔い改めてわたしに従いなさいという意味が含まれている。

イエス様が、レビを招いたように、私たちもイエス様に招かれている。いつも繰り返し罪を犯してしまう罪深い私達にも、イエス様は愛の眼差しを持って、今「わたしについて来なさい」わたしの元に帰って来なさいと招いておられる。そのイエス様の招きに応えたい。レビ(マタイ)はすぐに立ち上がり全てを捨てて(ルカ5:28)イエス様のお言葉に従った。レビ(マタイ)はイエス様に関わることなどゆるされない程の罪人の自分を招いてくださった恵みの喜びに満たされた。それが次の行動に表されている。

II. 招かれる者から招く者へ

「それからイエスは、レビの家で食卓に着かれた。取税人たちや罪人たちも大勢、イエスや弟子たちとともに食卓に着いていた。大勢の人々がいて、イエスに従っていたのである。」(15節)

レビ(マタイ)は自分の家に取税人仲間やその他の罪人達(律法を守れないため見下されていた人達)を大勢招き、共に食卓を囲んだ。彼は喜びに満ち溢れ、自分のような罪人をもイエス様は招き、自分の人生を新しく変えてくださったイエス様を皆に紹介した。私たちは伝道をしなければならぬという義務感に陥ってしまう。しかしそうではなく、レビ(マタイ)のようにイエス様がどん底であった彼の人生を新しく変えてくださった事実を証し、この喜びを分かち合うことが最高の伝道。招かれた私たちは招かれて終わりではなく、今度は招く者、つまり福音を知らない人にイエス様の事をお伝えする者に変えられ続けるのです。しかし、この喜びの

食卓に水を差す者達がいた。そのことが次に表されている。

### III. 罪人を招くために

「パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと一緒に食事をしているのを見て、弟子たちに言った。『なぜ、あの人は取税人や罪人たちと一緒に食事をするのですか。』」（16節）  
パリサイ派の律法学者たちは、神が与えた律法に自分達が作った律法を付け加えて人々に守り行うように命じていた。神の民であるユダヤ人達は自分達こそ神に選ばれた民族という間違っただ高ぶりがあり、また、自分の心の中の汚れや悪い思いを罪と自覚せず、うわべだけを見て自分達は罪人ではないという思いがあり、異邦人や罪人と共に食事をしないようにしていた。しかし、イエス様はレビ（マタイ）に食事に招かれると弟子達を連れて行き、取税人や遊女や律法に背いている罪人と共に飲食を共にし、楽しく喜びに満ちた時を持った。ところが律法学者たちにとってはイエス様が罪人達と食事をして交わっていることは考えられない事。彼らはイエス様が罪人の仲間であると考えた。律法学者たちは恐らく呆れてか、又は怒って、イエス様の弟子達に「なんで、あんなやつらと一緒に食事をしてるのだ」という風に言ったはず。彼らは弟子達に言ったが、そのことを耳にしたイエス様が答えられる。

「これを聞いて、イエスは彼らにこう言われた。『医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。』」（17節）  
このイエス様のお言葉は分かりやすく正論な答えです。ここでイエス様は真の医者として罪の病の中にある全ての人を招き癒すためにこの世に来たということを明確に言われている。イエス様がここで言われている正しい人とは、元々正しい人が存在しているのではなく、パリサイ派の律法学者たちのように神のこぼれを細かい所まで厳しく守り、外側だけを良い行いで飾り、心の中は汚れや悪、ねたみ、憎しみで満ちていたが、心の罪を認めず、自らを正しいとし、高ぶっている人達のこと。律法学者たちは複雑な境遇の中で泣く泣く取税人や遊女という仕事を選択するしかなかったであろう人達に対して、神の憐れみも伝えずに罪人扱いをしている。一方、自分たちは罪人達と違い自分たちには悪いところ罪は全くなく、むしろ神の律法を守り正しく健康なため医者に診てもらふ必要はないという態度。そのことをご存知であったイエス様は、律法学者たちに対して、「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」と言われた。真の医者であるイエス様は他を批判し、自らを正しいとする罪人である私たちが、へりくだり、自分の罪や心の中の弱さを認め、イエス様のところに来るのを待っておられます。

最近の私たちはどうでしょうか。私は特別悪いこともしていないし、生活も何とかうまくいっているからイエスは自分とは関係ない。また、イエス様の事を頭では理解し、私の全てであると思っているが、実際イエス様を実生活の中から排除してはいないか。もしそうであるなら今、主イエス様の前に静まり、悔い改めさせて頂こう。私たちは自分は正しい者と勘違いするのではなく、滅びて当然の私たち罪人を、イエス様が成してくださった私たちへの愛の十字架と力ある復活の御業を信じることによって、滅びから永遠の命への喜びに招いてくださっていることに感謝し、その招きに応える者でありたい。またその招きの喜びにいつも立ち返り、喜びに満たされて歩ませて頂こう。

レビ（マタイ）は、後にイエス様にマタイという名前を付けられます。マタイの意味は神の贈り物、賜物。この名前にはマタイが受けた神様の恵みが表されている。イエス様に変えられる前の彼は取税人としてお金を巻き上げて人々を苦しめ、人々が払うことができずに貸し付けたお金を記録するために筆を用いる者であった。しかし、イエス様に変えられた後の彼は、人々を苦しめていた同じ筆を用いて、イエス様に招かれた恵みの喜びから新しい命を与える神の言葉であるマタイの福音書を記す者と造り変えられました。レビ（マタイ）がイエス様に招かれ変えられたのと同じように、イエス様は滅びるしかなかった私たち罪人を招いてくださり、ただ主の恵みの御業によって救い出してくださった。その感謝と喜びにいつも満たされて、それぞれに遣わされている場所で主にお仕えし、人々を愛して参りましょう。